

日本語の再発見

訓読の価値

「詞、心におよばず」とは言へ、「事の趣、更に長し」の仮借に比べて、訓読の方が読み易く解り易いことは明瞭である。それで、“訓読”の漢字がどんどんふえて行った。

たちばなの はなちるまとの ほるとぎす かたこひしつづ なくひしそおほき
橘之 花散里乃 霍公鳥 片恋為作 鳴日四曾多寸

これは、『万葉集』の後期に見える作品の一つであるが、ここでは、“乃・四・曾・寸”の四字だけ、“仮借”の万葉仮名が使はれてゐて、あとは全部“訓読”の漢字である。

これだけ訓読の漢字が多いと、大層読み易くなることは、前の「和歌夜度爾……」の歌と比較してみるとよく判らう。それで、日本語の表記法はこの方向に進んで行き、『古事記』はこの表記法で書かれるようになったものである。

ともあれ、『古事記』が作られた頃には、日本語はたいていの言葉が漢字に翻訳できるまでに、漢字が広く深く理解されてゐた。それで、“仮借”に満足せず、中国語を表すための漢字を、“日本語を表すための漢字”に改造してしまったのである。

第五章 日本の文字

外国の表語文字を自分たちの表語文字に改造することは大変な大事業で、紀元前二五〇〇年にアッカード人がこれを行って以来、いかなる民族も成し得なかつた事である。仮借のラテン文字をそのまま“又借り”してゐる西欧諸国とは、正に天と地の差がある。

しかしながら、この事は西欧の学者たちには、文字学者、言語学者でさへ解らないやうである。片や、紀元前二五〇〇年の大昔の出来事であり、片や東洋の果ての一小国の不可解な文字だったからであらう。幸ひに日本が目覚しい発展を遂げたので、これからは西欧の学者たちも、“表語文字”や“訓読”の価値、“漢字仮名混り文”の価値に目を着け、研究するに違ひない。既に、マサチューセッツ工科大学では、世界各国の表記を比較研究し、「日本の漢字かな混り文が世界一速く読解できる」ことを発表してゐるといふことは先に述べた。遅時きながら、まことに喜ばしい事だと思ふ。